

ローティの左翼論の源流

大賀 祐 樹*

R. ローティは学者としてのキャリアを分析哲学の研究者としてスタートさせ、やがて哲学の「解釈学的転回」という考え方の提示によって脚光を浴び、プラグマティズムを復活させ、リベラル・デモクラシーを再評価する政治思想へと至ったが、90年代後半以後は現代における政治的左派の在り方について考察した左翼論を主なテーマとしており、注目を集めている。言語哲学と政治的左派といえ、N. チョムスキーによるアメリカに批判的な議論が有名であるが、ローティの政治的立場はチョムスキーとは反対に、基本的に親アメリカ的なものである。

現代のアメリカにおいて政治的左派であるということは、アメリカを世界の特に第三世界の貧しい国々を搾取する「帝国」として見なし、イラクやアフガニスタンその他の紛争地域への米軍の派遣を「侵略」であると考え、大企業（マイクロソフト、マクドナルド、コカコーラ、ナイキ等）による市場の支配を「資本主義的」として批判するような立場をとることが主流である。そのような在り方に対して、ローティは独自でエキセントリックとも見えるような左翼論を展開する。本論文では、まずロー

ティの左翼論を検討し、その発想の源流がどのような歴史的な文脈からもたらされているかを探ることによって、ローティが現代および将来における「健全な」左翼の姿をどのように描いているかを模索する。

I ローティの政治的ステートメント

ローティの左翼論は『アメリカ未完のプロジェクト～20世紀アメリカにおける左翼思想』という本に収められている。この本の邦題はローティ本人の意向によって、J. ハーバーマスの『近代未完のプロジェクト』を想起させるものになっているが、原題はJ. ボールドウィンの『次は火だ』の一節からとられた *Achieving Our Country*（我々の国を完成させる）というものであり、この言葉にはローティの考える左翼の立場が明確に表されている。

右と左という概念は相対的なものであり、どのような立場をもって政治的な右派と左派を区別するのかということもその国ごとの政治環境によって異なってくる⁽¹⁾。一般論としては、国家や伝統を尊重し、資本主義経済に肯定的な立場を右派、権力に批判的で改革を望み、経済的な平等を求め資本主義経済に批判的な立場を左

* 早稲田大学大学院社会科学部 博士後期課程2年（指導教員 古賀勝次郎）

派と分類する場合が多い。ローティが右派と左派をどのように分類するのかということは以下の記述の中から窺い知ることが出来る。

私たちの国家が政治的に活発な「右翼」と「左翼」を持つかが、その議論は継続するだろう。…「右翼」はどんなものにも変更する必要があるとは決して考えない…つまり国家は基本的に良い状態にあり、過去の方がもっとずっと良かったかもしれないと「右翼」は考えるのである。「左翼」は私たちの国家がまだ完成されていないと主張している。…「左翼」が傍観者になり、回顧的になるかぎり、それは左翼をやめることである。[Rorty 1998: 14]

ローティは右派と左派の区別を国家権力や自国の歴史に対する誇りとアイデンティティに対して肯定的であるか批判的であるかという尺度によって決定するのではなく、自らの国がすでに完成された (achieved) ものであり、むしろ昔のほうが良く、現在では古き良きものが失われつつあるので、それを守り復活させなければならないと考えている人々を「右翼」、自らの国は未だ改良の余地があり、完成させる (achieving) ために様々な改革運動を行う必要があると考えている人々を「左翼」として分類する。一般的な右派と左派の区別の方法と比較すると、右派が過去を志向しているのに対し、左派が未来を志向しているという点に関しては共通している。しかし、ローティの考え方において独特なところは、「右翼」と同様に「左翼」もまた自らの国の参加者として自国に愛着を持ち、その歴史に誇りを持った上で、自らの国をより良く改良していくという立場であるということである。つまり、ローティは「左翼」もまた「右翼」とは違った志向性を持ちながらも、同様に愛国的になる必要があると考えているのである。

ローティが左翼論にとりかかるようになったきっかけは、現代のアメリカにおける政治的な「左翼」の衰退である。ローティの歴史分析によると、アメリカの「左翼」は19世紀～1960年頃まで伝統的に労働問題に主に取り組んできた「改良主義左翼 (Reformist Left)」, 1960年代の10年間に学生運動による主に公民権運動と反戦運動に取り組んだ「新左翼 (New Left)」, 1970年代以降に実際の政治の活動から離れ、大学内で文化の理論を研究することに専念するようになった「文化左翼 (Cultural Left)」の三種類に分類される。

「改良主義左翼」はマルクス主義が本格的に広まる前の19世紀から存在し、共産党的な手法以前の現実的な手法により少しずつ労働問題を解決し、労働者の地位を改善させていった。これは一般的に「オールド・レフト (Old Left)」と呼ばれているものと同じものと見なされる。「改良主義左翼」が最も大きな成功を収めたのは1930年代～第二次世界大戦中における「ニューディール (New Deal)」の時代、そして1960年代のJ.F. ケネディとL. ジョンソンという「ニューディール」を引き継ぐ二人の民主党の大統領の時代においてであった。「ニューディール」を行ったF.D. ルーズベルトやケネディ、ジョンソンは一般的には「左翼」とはみなされていない。彼らはアメリカ合衆国の大統領であり、決して社会主義者でも共産主義者でもなく、いわゆる「リベラル」という立場に分類される。しかし、ローティは彼らのような「リベラル」な大統領も「改良主義左翼」のリストに加えている。

アメリカの政治地図においてこの「リベラル」という言葉の定義は複雑である。一般的に

「リベラル」と分類される民主党左派の人々は政治的には自由主義であり、価値観の多様性の実現を求めるが、経済的には自由経済に規制を加える政策を支持する。経済政策の面から見れば、共和党の人々のほうが自由を重んじ、規制を撤廃する政策を支持する。しかし、より「ラディカル」な立場の人々から見れば、民主党も共和党も資本主義経済の枠内での議論に留まっているため同類として見なされる。ローティが自らを位置づけ、発言の基盤としているのはこのいわゆる「リベラル」という立場であろう。

ローティが分類する「新左翼」とは学生運動を主とするアメリカのベビーブーム世代の若者達による、より「ラディカル」な運動である。これは、一般的に呼ばれている「ニュー・レフト」というものと同じと見なされる。彼らはマルクス主義的なイデオロギーとユートピア的な理想を掲げるが、結局のところ革命を起すことは出来ず、やがて「政治の季節」は終わりを迎える。ローティによれば「新左翼」は公民権運動を成功させ、強烈な反戦運動によってベトナム戦争を終わらせるきっかけをつくったという功績を残したが、反面においてアメリカの奴隷制、先住民虐殺、戦争介入等の血塗られた歴史に注目し、アメリカを悪の国をみなすような反権力的思考という形の負の遺産を遺した。

最終的に政治的な勝利を得ることができなかった「新左翼」の思考の枠組みを受け継ぎ、学者となった人々は、同様にマルクス主義的な学生運動が盛んであったフランスの哲学などのいわゆる「大陸哲学」の研究に没頭し、左翼的な思想を理論化するようになった。彼らはその終末論的な思想から、何らかのカタストロフィーによって世界が一変するという考え方を

受け継いでいるが、60年代の挫折の経験から完全に絶望感を抱いている。このような人々をローティは「文化左翼」と分類している。ローティによれば、「文化左翼」は女性や同性愛者、マイノリティー等の抑圧を告発し、その地位を向上させるという功績を達成したが、「新左翼」から引き継いだ「反アメリカ」的な意識によって実際の政治から遠ざかってしまった。というのも、アメリカの二大政党制においては、ラディカルな立場の人々によって議会の多数を占める事や大統領を出すことは不可能だし、たとえ最も立場に近いような民主党左派の「リベラル」な人々といえども彼らの考えるようなラディカルな立場には同調しないうえに、そのような「リベラル」な人々もある程度右派の意見に妥協しなければならないという圧倒的な「現実」の壁が存在するために、議会の選挙や大統領選挙に投票することは彼らにとって無意味な行為に思えるからである。

「文化左翼」が政治を哲学的に理論化している間に労働運動は衰退し、グローバル化も伴って貧困の問題はより複雑なものになった、アメリカの大企業は労働力を安く確保できる東南アジアや中国、中南米に生産の拠点を移したために、アメリカ国内の工場労働者の立場が弱くなってしまったのである。このような現状を打開し、再び現実的な政治勢力としての「左翼」を復活させるために、ローティは①「文化左翼」はその理論的な哲学習慣を一時停止し、②アメリカ人であることを誇りに思うような愛国的「左翼」になるべきであるということを提案している [Rorty 1998: 98-99]。では、一体どのようにしてローティはこのような政治的立場に立つようになったのだろうか？

II ローティの生い立ちと思想形成

ローティの政治的立場と思想の形成には家族が与えた影響が大きい。リチャード・メイナード・ローティは1931年10月4日にニューヨークで、父ジェイムズ・ローティ、母ウィニフレッド・ラウシェンブッシュ・ローティの間に生まれ、兄弟はなく一人っ子である。同じ1931年生まれとしては、50年代のアメリカの若者文化を代表するジェイムス・ディーンがいる⁽²⁾。ローティの父方の祖父は1850年頃にアイルランドから移民した。当時のアメリカ社会ではアイルランド移民は下流に位置したにも関わらず、その身分を超えて18世紀にイギリスから移民した一族の娘と結婚した。ローティの母方の祖父は「社会的福音運動 (Social Gospel Movement)」の創設者であり何冊かの著作を残したウォルター・ラウシェンブッシュという人物である。ラウシェンブッシュ一家の周辺にはアメリカが第一次世界大戦に参戦した際に金融業者や軍需産業がその決定に関与したかどうかを調査した「アメリカ合衆国議会設備調査委員会」、通称「ナイ委員会」の委員長を務めたノースダコタ選出の上院議員 G.P. ナイヤ、ウィスコンシンの労働問題に携わった P. ラウシェンブッシュ、E. ブランダイス夫妻などがおり、社会問題に非常に関心が高い一族であった。

ローティの父ジェイムズは、アメリカの共産党の党员ではなかったもののシンパであり、1920年代には『ニューマッセズ (The New Masses)』という共産党の機関誌の編集者として働いていた。母ウィニフレッドもラウシェンブッシュ一家の高い政治意識に影響されてシカゴ大学の大学院で社会学者の R. パーカーに学

んだ。そして、ジェイムズと同様に共産党のシンパとなった。

リチャードが誕生した直後の1932年、ジェイムズは共産党の大統領候補を支援する組織を指揮していたが、アメリカの共産党がコミンテルンの強力な統制下にあり、より民主的な社会主義の樹立を目指したトロツキーを追放したスターリンの独裁体制を支持していることを知り、夫婦そろって共産党と袂を分かった。ローティ夫妻は同時期に共産党と決別した、後にニューヨーク大学哲学教授となり J. デューイの弟子でもあるシドニー・フックと行動を共にする。反スターリン派左翼系知識人の拠点となる『パルティザン・レビュー (The Partisan Review)』誌が創刊されるのが1934年のことで、また創刊当時は『ニュー・マッセズ』誌の援助によって発行され、数年後によく共産党と決別したことを考えると、彼らの「転向」がいかに早期のものであったかがわかる。

父ジェイムズはその「転向」によって共産党から「トロツキー派」とみなされ、党の発行する新聞『デイリー・ワーカー (Daily Worker)』誌によって風刺漫画を描かれるようになる。その時期のジェイムズは共産党からの批判のとおり、トロツキーの影響を受け、より社会民主主義的な路線を志向するようになり、アメリカ社会党の大統領候補ノーマン・トマスと親交を持ち、社会党の機関誌を購読する他にも、「デレオン派社会主義労働党」と「シャットマン派社会主義労働党」の機関誌を定期購読しており、幼い頃のリチャード少年は家に置いてあるそれらの新聞を苦勞しながら読んでいたという。
[Rorty 1998: 59]

30年代から40年代にかけてローティ夫妻は

ニューヨークの様々な労働団体、特に後に M.L. キング Jr 牧師と共に公民権運動を指導し、63年の「ワシントン行進」の中心的役割を果たした A. フィリップ・ランドルフが指揮する黒人労働組合「ブルマン寝台車給仕友愛会」の広報兼ロビイストとして働いた。また、「レオン・トロツキー擁護委員会」を支援し、メキシコに亡命していたトロツキーに事情聴取を行う調査委員会の委員長としてフックによって担いだされたデューイのメキシコ滞在にも、委員会の広報として同行した。

ローティー家は一年の半分を自宅のあるニュージャージー州西部のデラウェア川渓谷沿いにある田舎町フラットブルックヴィル村で過ごし、後の半分をニューヨークのホテルに滞在していた。リチャード少年も両親とともにこの二つの街を往復していた。ニューヨークでのローティー家は労働運動の活動家として、またフックやライオネル・トリリング等のいわゆる「ニューヨーク知識人」で形成されるサークルの一人に属していた。幼少の頃のことをローティは次のように回想している。

10代の頃、私はシドニー・フックやライオネル・トリリングが『パルティザン・レビュー』誌で発表していた反スターリン的な言葉のすべてを信じていた。その理由の一部は、たぶん私が赤ん坊の頃に彼らの膝の上に抱きかかえられていたからであろう。私の母は、私が七歳の時にジョン・デューイも、数年後に暗殺されたイタリア無政府主義の指導者、カルロ・ツレスカも出席したハロウィンパーティーで、来賓に小さなサンドウィッチを出す名誉を得たことをよく話してくれた。[Rorty 1998: 61]

現在のローティが哲学者としても政治思想家としても最も影響を受けたと公言しているのがデューイであるが、父ジェームズの知人でも

あったデューイに直接会ったのはこの七歳の時のハロウィンパーティーの一回きりであったという。また、リチャード少年が社会主義に目覚めたのもニューヨークに滞在していた時のことである。

12歳の冬の間は、無給の使い走りとして、グレイマー・パークのはずれにあった「労働者保護同盟」の事務所（両親がそこで働いていたので）から報道発表の原稿を、角を曲がったところにあったノーマン・トマスの家と125丁目の「ブルマン寝台車給仕友愛会」にあった A. フィリップ・ランドルフの事務所に届ける仕事をした。地下鉄のなかで運んでいる文書を読んだものだった。工場の所有者が組合のオルガナイザーに対して何をしたか、農園所有者が分益小作人たちに、あるいは白人の機関士組合が有色人種の消防士たちに何をしたか（ディーゼルエンジンが石炭を燃やす蒸気機関に取って代わりつつあったので、白人の機関士たちは消防士の職を望んでいた）などについて、そうした文書から多くのことを知った。こういうわけで、12歳にして私は、人間であるということにおいて肝心なのは、社会的不正に対する闘いに人生を捧げることだと知ったのである。[Rorty 1999: 48-49]

リチャード少年が当時の左派の人々の洗礼を受けたのはニューヨーク滞在時だけではなく、ローティー家のフラットブルックヴィル村の自宅では、トロツキーの秘書の一人であったジョン・フランクという人物を一時期匿っていた。ローティ家の隣人には、「1905年革命」に関わったもののスターリンの弾圧を受けアメリカに逃れていた J.B.S. ハードマンという人物がおり、リチャード少年は両親や友人達とハードマンとの会話の中からスターリンの恐ろしさを確信するようになった。両親の書棚には『レオン・トロツキー裁判』と『無罪』というデューイ調査委員会の報告からなる書物があり、リチャード少年は他の家の子供達が自分の家にあ

る聖書を見るような思いで、救済の真理と道德的な卓越性の光を放つ本としてその書棚を見つけていたという [Rorty 1999: 5]。時折の休暇を前述のラウシェンブッシュ夫妻の住むマディソンで過ごしたが、そこでもデューイの弟子マックス・オットーやウィスコンシンの革新主義の政治家として有名であった R. ラフォレットの一家のサークルとも交流していた。

1930年代のスターリンによる大粛清を知った「ニューヨーク知識人」の主立った人々は反スターリン、親トロツキーの立場をとるようになった。リチャード少年も幼少期に両親とその知人達による一種の英才教育を受けて、トッド・ギトリンが「赤いおむつをつけた反共主義の赤ん坊」と呼ぶような育ち方をしたのであった。そして、「まともな人なら誰もが、トロツキストとは言わないまでも、少なくとも社会主義者であるということを知るようになった」 [Rorty 1999: 6] のであった。

そのようにして、幼少の頃から社会主義の意識を植え付けられ、将来は自らもその闘いに身を投じようと考えると同時に、リチャード少年は「人には言えない」秘密の神秘的な趣味を持っていた。最初はチベットに興味を持ち、当時ダライ・ラマに即位した少年にお祝いの言葉を添えてプレゼントを送ったという。次に彼はフラットブルックヴィル村周辺の山間部に自生している野生の蘭に興味を持つようになった。リチャード少年は山の中を歩き回り、苦勞して蘭を見つけ、ニューヨークに戻ったおりに市立図書館で19世紀の植物学の本を見て調べていた。彼は熱帯原産の見栄えの良い蘭よりも北アメリカに自生する蘭のほうが気高く純粹無垢で精神的に価値が高いと考え、それに出会った時

には何か聖なるものに触れたようなワーズワース的な詩的な瞬間を感じていたと述べている。しかし、マルクス主義的な価値観を齎っていたリチャード少年は、そのような社会的には何の役にも立たないブルジョワ的な趣味を「トロツキーなら良しとしないのではないか」とも考えていた。

1946年に15歳になったローティは、シカゴ大学の「ハッチنز・カレッジ」に入学した。そこでローティは自分の中に抱える「トロツキーと蘭」の葛藤、社会的な闘士であると同時に霊的なスノップであるためにはどうすれば良いのか？というオブセッションを解決するために哲学を学び始めた。当時のシカゴ大学には L. シュトラウスや R. カルナップをはじめ、ナチスから逃れてきたヨーロッパの偉大な学者が揃っていた。ローティはシュトラウスから古典哲学を学んだが、シュトラウスの講義には同時期に学生であり、後にシュトラウスの後継者となる A. ブルームなどシカゴの学生の中でも最も優秀な人々が揃っていて、ローティもその中に加われたことを喜んではいたが、「彼の観点を本当の意味で理解することは不可能だった」と述べている [Rorty 2006: 150]。しかし、シュトラウスに触発されてか、ローティは15歳の夏にプラトンの著作を通読し、しばらくの間はプラトン主義者になりたいと心底思っていたという。

ローティは論理実証主義の大御所であるカルナップと、ホワイトヘッドの弟子であった C. ハーツホーンにも教えを受けたが、シカゴ時代に最も学んだのは R. マッケオンの下で学んだ歴史哲学であった。博士課程ではイェール大学に移り、C. ヘンベル、P. ワイス、R. ブランボー

といった人々に師事した。当時のローティの興味は主にマッケオンの歴史哲学にあり、アリストテレスのデユナミスと17世紀合理主義者の可能性の概念についての哲学史的な論文を書いたが、同時に「仮定的条件文の正確な分析といったA.J. エイヤーもどきの論題を持った博士論文」[Rorty 1998: 130] (タイトルは“The Concept of Potentiality”) も書いている。これはローティによると、当時のアメリカの哲学界の主流が分析哲学になりつつあり、職を得るために書いたものであったという。1956年に25歳で「素早く」Ph.D. を取得するが、逆に26歳になる前に卒業してしまったために合衆国陸軍で2年間の兵役期間を送ることになる⁽³⁾。兵役を終えた1958年に、ローティはウェルズレー大学というボストンの小さなカレッジの専任講師という職を得るが⁽⁴⁾シカゴやイエールでの同級生達と比べるとあまり良いポストとは言えない。それはやはり本来の興味からは少し外れた、「職を得るために書いた」という程度の博士論文で一流の哲学研究者とは認められなかったためであると考えられる。

そこでローティは、このウェルズレー大学専任講師時代に分析哲学者の中でも最新の理論を学び始め、論理実証主義よりも後期ウィットゲンシュタインの『哲学的探求』やW.V.O. クワイン、W. セラーズなどといったどちらかというところかな哲学に興味を持ち熱心に研究した。その甲斐あってか、3年後の1961年には名門のプリンストン大学哲学科に助教授として就任することができた。60年代のローティは分析哲学のなかでも「心身問題」を主な研究対象としており、「消去的脳同一説」という理論についての論文を書く傍ら、『言語論的転回』という言語

哲学の代表的な論文を集めたアンソロジーの編者を務めている。

70年代になると、まずヘーゲルを再読し、それを通じてデューイのプラグマティズムを「再発見」している。ローティが学部生だった頃のシカゴ大学ではシュトラウスやカルナップのように哲学的に絶対的なものを探求する風潮が強く、デューイは哲学者としてはあまり重要視されていなかったため、ローティ自身も幼少時代からのヒーローであったデューイからしばらく離れていた。また、同時にヨーロッパ大陸の最先端であったデリダやフーコーの著作を読み、ハイデガーやニーチェの哲学に溯ることによって新たな視点を獲得した。

そのような、後期ウィットゲンシュタイン、クワイン、セラーズに加えD. デイヴィッドソンのような言語哲学とニーチェ、ハイデガー、デリダのようないわゆる「ポストモダン」の哲学にデューイのプラグマティズムを加えた観点から書かれたのが、ローティの最初の主著である1979年の『哲学と自然の鏡』である。ちょうどこの本を出版した頃に、ローティは「アメリカ哲学会東部部会」の会長を務めるが、理論的な分析哲学が主流であった哲学会においては英米の言語哲学、分析哲学とヨーロッパ大陸の現象学的、解釈学的な哲学とを同等に論じることは異例なことであった。というのも、英米の哲学者はヨーロッパ大陸の哲学をあまりに神秘的な次元で議論をしすぎているため「形而上学的」で無意味なものとみなしていたし、ヨーロッパ大陸の哲学者は英米の哲学を科学的思考に偏った薄っぺらで深遠さを欠き「哲学」の名に値しないものとみなしていたため、双方の文化圏の哲学的な交流は途絶えていたからである。アメ

リカにおいてヨーロッパの哲学が受容され、その研究の場とされているのは文学部においてであったために、次第にプリンストンの哲学科の雰囲気⁽⁵⁾と馴染まなくなり、1982年にヴァージニア大学の文学部に比較文学の教授として招かれ異動した⁽⁶⁾。ヴァージニア大学で文学部の学生を相手に授業をすることは自らが興味を持つ哲学史や大陸哲学を自由に取り上げることができたため、気分が楽になったようである。

この時期の政治的立場をローティはこのように述べている。

私は30代まで政治的目標として望ましいものは社会主義であると考え続けていた。しかし、1970年を過ぎた頃から市場主義経済はおそらく永遠に私たちと共に存続し続けるであろうから、それゆえに私的財産を取り除くのではなく、何か別の社会的不平等を是正する方法を持たなければならないと考えるようになった。[Rorty 2006: 99]

ローティは典型的なマルクス主義者ではなかったし、60年代の「新左翼」にシンパシーを抱いていなかったが、それでもある種の社会主義的な変革に希望を持っていたようである。しかし、70年代以降、資本主義経済体制の枠内での格差是正という「社会民主主義」的な考えに転向していったようである。1979年に研究生としてローティの下で学んだ野家啓一は次のように述べている。

最初、ローティの自宅で開かれた哲学科のパーティに招かれた時、同僚の先生や大学院生たちが床に車座になってディスカッションしていたのですが、その話題は哲学というよりは政治の話でした。次の選挙がどうだとか、最近の民主党の傾向はどうだとか盛んに議論していました。私はローティにはそういう面もあるのかと、はじめて気がついたわけです。[野家2003: 15]

ヴァージニア大学においてヨーロッパ大陸の哲学や様々な文学作品など、自らの興味の赴くままに自由な研究に専念できるようになったローティは、その成果として1989年に『偶然性・アイロニー・連帯』という著書を発表する。この著書の政治的ステイトメントは、哲学が近代的な価値観を批判する「ポストモダン」的なものになったからといって、リベラリズムやデモクラシーといった近代ヨーロッパが生み出した社会制度まで否定しなければならないということにはならず、私的な趣味としての哲学と公的な規範としての政治制度は分離して考えなければならない、ということである。このような考え方は「ポストモダン」的な哲学と政治を連結して考えている「文化左翼」に対して、政治的な希望を保持する「改良主義左翼」の後継者としての立場からのアンチテーゼが含まれている。

公と私の区別という考え方は、ローティが幼少期～青年期に抱いていた、トロッキーという政治的な闘士に憧れて自らもそのようになりたいと願いつつも私的な趣味として野生の蘭という「エロティシズム」に惹かれているというオブセッションを解決した結果の表れでもあった。

ローティが最初に名を挙げたのは分析哲学者としてであったが、現在のローティの回想を辿っていくと、もともと哲学を志したのは幼少期の家族と知人達から教わった社会正義を目指す意志と、神秘的なものに憧れるという私的な趣味との不整合というオブセッションを解決するためであって、分析哲学は当時のアメリカの哲学界の流行に遅れないように、研究者の職を得られるに取り組んでいたものにすぎなかった

ということがわかる。そのため、『偶然性・アイロニー・連帯』によって突如として政治思想を志向し、『アメリカ未完のプロジェクト』において左翼論を展開したのも、元来目標としていたものが自らの思想的成熟によってそれまで学んできた様々な哲学と整合的に表現できるようになったためであると考えられる。

また、ローティが理想とする愛国的な左翼という立場も、決してパラドックスではなく、ローティが幼少期に会い、憧れを抱いていた様々な人物から自然と受け継いだものであり、エキセントリックというよりもむしろ典型的な伝統的左翼へ回帰することを主張したものであることがわかる。

Ⅲ アメリカ左翼運動小史

ローティが理想とする伝統的な「改良主義左翼」とはどのようなものかということを理解するために、日本では馴染みの薄いアメリカの「左翼」の歴史をより複合的に補足的な検討をすることによって理解を深める必要がある。ここでは特に一般的に「オールド・レフト」と呼ばれている左翼の変遷と、左翼の主流が「ニュー・レフト」と呼ばれている左翼にどのように変化していったか、「ニュー・レフト」がどのように運動に挫折したかということに焦点をあてた検討を行う。

アメリカの政治史において、独立戦争より後には南北戦争という大きな内乱はあったものの、イデオロギー的な闘争や階級闘争は見られない。そのため、アメリカには左翼は存在しないのではないか？という見方も出来る。それに對し、マイケル・ハリントンはアメリカにはヨーロッパ以上に確固とした「社会民主主義」

が存在していたが、それは表立った動きとしては見えにくい「隠れた大衆運動」であったと分析している [Harrington 1972: 252]。アメリカの左翼の一つの特徴は、1886年に結成されたアメリカ労働総同盟 (AFL)、の活動方針によく表れている。AFLの初代会長となったサミュエル・ゴンパースは、AFL以前に過激な労働運動を行い大衆の支持を得ることができなかった「労働騎士団」の失敗を反面教師にして、①ユートピア的、革命的政治思想や団体とは関わらない、②労働者の政党を作らない、③ブレッド・アンド・バター方式（生活に関係した問題だけを取り上げる）に集中し、資本主義経済体制に適応するという基本方針をとり、これはビジネス・ユニオン方式と呼ばれた。もともとアメリカでは非常に早期から男子普通選挙権が与えられていたために、労働者が議会政治の重要なアクターとして二大政党制に取り込まれてきたので、労働者の政党としての「第三党」が議会で多数を占めたり、大統領を輩出することは望みにくかった。また、ハリントンの指摘によると、そもそもアメリカという国家は建国以来急進的なまでにユートピア主義的であったためにマルクス主義が流入する以前から独自の労働運動が行われていたため、マルクス主義が組合に与える影響は限定的なものであった [Harrington 1972: 133]。

反社会主義と政党政治への不干渉を標榜したゴンパースのAFLの路線とは別に、主に鉄道会社に対してストライキを指揮し、投獄された経験もあるユージン・デブスは、社会党の大統領候補として1900年以後5度選挙戦を戦った。社会党は1912年の選挙戦では共和党のW. ウィルソンや民主党を離れたT. ルーズベルト、民

主党の W.H. タフトを相手に90万票以上、投票総数の6%という票を獲得し、地方政界に79人の市長と1200人以上の市議を輩出した。これは、デブスが大衆的な英雄であり、個人的な人気が高かったことによるものであり、AFLの支持を得たものではなかった。社会党の躍進も1919年にロシア革命の影響で共産主義者が脱党したことによる党の分裂によって大幅に衰退した。1924年の大統領選では、社会党の独自の候補を立てず、他に二大政党以外で独自に立候補した前述のウィスコンシンの革新主義政治家ロバート・ラフォレットを支援したが共和党のクーリッジの大勝を許してしまった。1928年以後は再び独自候補としてノーマン・トマスを立てている。

1932年の F.D. ルーズベルト大統領の誕生以後の長期の民主党リベラル派による政権は労働組合の組織化を活発にさせたが、民主党以外の左派の政治勢力を小さくする結果となってしまった。1935年に労働組合を組織することを保護した「ワグナー法」が成立し、1938年には鉄鋼、電気、自動車、石油など新しい産業を中心に組織した産業別労働組合会議 (CIO) が AFL の対立組織として結成された。CIO の指導者であった J.L. ルイスはゴンパースの路線に対抗し、共産主義勢力と手を組んで組合をオルグし、強力な政治的組織を築き上げた。しかし、1955年には双方の組合の対立の不毛さとマッカーシズムによる共産主義者の追放から組合員が減少し、両組合は合併して AFL=CIO が誕生した。

1930年代の社会主義者と共産主義者は対立によって大きく分裂をする。20世紀初頭の左派勢力はニューヨークを主な拠点としていたが、こ

の街には19世紀末に東欧やロシアから移民してきたユダヤ系の人々が多く労働者として居住しており、熱心な支持者として左派勢力を支えていた。『パルティザン・レビュー』を創刊したウィリアム・フィリップスとフィリップ・ラーヴもユダヤ系であり、ローティー家と交流の深かったフックやトリリング夫妻、アーヴィング・ハウといった「ニューヨーク知識人」のサークルのメンバーの大半はユダヤ系であった。

1919年に社会党が分裂し、20年代のアメリカ経済の繁栄期には左派勢力も衰退したが、大恐慌が訪れると再び活性化した。しかし、30年代にモスクワのコミンテルンの方針を巡って、共産主義者もモスクワ支持派と反スターリンのトロツキー支持派とに分裂し、トロツキー派は社会党に近い立場に立つようになる。上記の「ニューヨーク知識人」の多くは30年代の間に後者の立場へと転向しており、ローティー家も同様であった。そのような転向が起こったのは、彼らがみなスターリンの全体主義的な体制の欺瞞を見抜いていたからである。1936年の大統領選では、共産党だけではなく AFL と CIO 傘下の労働者、ラフォレットの流れを汲むウィスコンシンの革新党、リンカーン以後共和党に投票し続けてきた黒人⁽⁷⁾など低所得層が一斉にルーズベルト支持にまわり、その結果社会党の党勢の衰退は決定的なものとなった。

共産党とローティー家の所属する「ニューヨーク知識人」との争いは1950年代まで続く。まず、1950年にソ連に核開発技術を流出させたとしてローゼンバーグ夫妻が逮捕され死刑に処されたという「ローゼンバーグ事件」が起きたが、共産党は国際的に連帯し死刑判決に反対し

た一方で、多くがローゼンバーグ夫妻と同じユダヤ系であり、もともとはマルクス主義者でもあった「ニューヨーク知識人」の多くはこの事件について沈黙した。それは、冷戦体制の開始という時代背景が理由にあった。当時はまさにJ. マッカーシーによる「赤狩り」の時代であり、もともと戦闘的な反スターリン派であった「ニューヨーク知識人」の面々は、ローゼンバーグ夫妻と同じユダヤ系、マルクス主義者というレッテルから逃れるために「忠誠」を示す必要があったのである。ローティの言う「反共左翼」という一見矛盾したような立場は、「赤狩り」の時代を通してより鮮明になった。反スターリン＝反共の立場を明確にし、時代に適応したことによって生き残った「ニューヨーク知識人」に対し、共産党の支持者は「赤狩り」の犠牲となり、50年代以後共産党は壊滅状態となる。

一方、「ニューヨーク知識人」の内部でも、アメリカの冷戦政策を積極的に支持し政府に追従した「肯定者 (affirmer)」という立場と、反スターリンでありつつ反体制的な立場も維持する「反対者 (dissenter)」という二つの派閥に分かれた。「肯定者」としてはフックが代表的であり、彼は反共産党組織「文化的自由アメリカ委員会 (ACCF)」を結成した。彼らは『コメンタリー (Commentary)』という雑誌において主に議論を行ったが、この『コメンタリー』誌は中道右派から次第に保守化していき、60年代の「新左翼」に対抗して「新保守主義 (Neo Conservative)」として強力な反共的論陣を張るようになり、やがてR. ニクソンやR. レーガンの共和党政権の理論的支柱にすらなっていた。ACCFは非公式にCIAから資金を受け取っていたことが発覚するが、後にC. ラッ

シュラによって批判を受けることにもなる。ローティの父ジェイムズもフックに従いACCFに参加しており、ローティ自身はそのことを次のように述べている。

「冷戦」を煽動することは、私の家族やその友人たちのしていた他の立派な活動とつながっている、と当時の私には思われた。そして、今もそうである。いまだに私はヒトラーとの戦いとスターリンとの戦いに大きな相違があるとは思えない。「改良主義左翼」がもっと強力であったら、第二次世界大戦後のアメリカが二股をかけることができただろうという考えは理に適っている、と私は今でも思っている。その考えに従って、アメリカは世界中で少数独裁政治を社会民主制に変える国際運動の指導者になることもできただろうし、また気の狂った専制君主の支配する邪悪な帝国の拡大を阻止する核武装した超大国になることもできただろう [Rorty 1999: 62-63]。

ただし、彼ら「反共左翼」は当然ながらマッカーシズムとは一線を画していることも忘れてはならない。もともとマルクス主義者であった彼らは、スターリンが革命政権を私物化し、ヒトラーと変わらぬ独裁体制を築いたことから反スターリンの立場になったのであって、マッカーシーやニクソンの偏狭な反共主義と比べ、より内在的で本質的な批判を行うことができた。「肯定者」には他にアーヴィング・クリストル、ネイザン・グレイザー、ノーマン・ボドレッツ等があり、『イデオロギーの終焉』を著わしたダニエル・ベルも中道の立場を保持しつつも、どちらかというこのグループであったとされている。

このように、さらなる「転向」を遂げる左翼が存在した一方で、それに反対し体制に順応しないグループが「反対者」のグループであった。ハウはまさに「異議」という意味を持つ『ディセント (Dissent)』という雑誌を1954年に創刊

し、ルイス・コーザー、マイケル・ハリントン、メイヤー・シャピロ、ノーマン・メイラー、エーリッヒ・フロム等と共に民主的な社会主義を目指した論陣を張った。「肯定者」のグループと「反対者」のグループは互いに激しい議論を行ったが、その違いは体制との距離の違いであり、両者ともに反スターリン、反ソ連であることには違いはなく、そのため「赤狩り」の対象とされるものではなかった。

1960年の大統領選で民主党のケネディが当選し、ケネディ暗殺後にジョンソンがその路線を継承した1968年までの間は、民主党リベラル派が再び政権に返り咲いたことによって30年代～40年代の「ニューディール」期のような「改良主義左翼」的な政策が実質的な内容を伴って行われた時期であった。しかし、かつて共産主義者であった左派の人々は冷戦と「赤狩り」の時代を通過してかつてのような盛んな運動を行う勢いを失っていた。この時代はそのような「改良主義左翼」の人々の負の部分が表出した時代でもある。F.D. ルーズベルト大統領は選挙で黒人の支持を集めていたにも関わらず「反リンチ法案」に署名することはしなかったし、トルーマン大統領の「反共」の精神を受け継いだジョンソン大統領はベトナムに深く介入した。彼らが残した問題に対する、「公民権運動」と「ベトナム反戦運動」に焦点を当てて活動を行ったのが、「民主社会を求める学生同盟 (SDS)」という学生団体を中心とした「新左翼」であった。

もともと白人主導の労働組合と黒人の労働者達の間の溝は深かった。白人の労働者にも人種差別の意識はあったが、それ以上に多くが非熟練、肉体労働に従事する黒人の労働者に職を与えるということは白人労働者自らの職の安定を

脅かすということが根底にあった。そのため、ランドルフの「ブルマン寝台車給仕友愛会」がAFLに加盟できたのは1936年のことであり、その後も黒人の労働者はAFLやCIOから歓迎されることは少なかった。黒人の公民権獲得が遅れたのは、ブッカー・T・ワシントンの「適応主義」によって権利獲得よりも経済的な向上を優先させる路線の運動とW.E.B. デュボイスの「ブラック・ナショナリズム」のように黒人であることを誇示し権利の向上を強く要求する路線の運動との対立など、黒人運動家の内でも分裂が絶えなかったことが理由となっている。

SDSはキング牧師を中心とする公民権運動に積極的に参加した。SDSのメンバーは共産主義者であったわけではなかったが、10代後半～20代の学生で構成されており、「ニューヨーク知識人」達の世代を「オールド・レフト」と呼んで一線を画そうとした。彼らは「オールド・レフト」を「赤狩り」に屈服し、体制に裏切った世代と見なしており、その穏健なリベリズムを批判し、自分たちはより「ラディカル」になろうとしていた。SDSは「産業民主化連盟 (LID)」という、リベラル系の団体の学生部として設立されたが、トム・ヘイドンをはじめとしたSDSの創設者たちはデトロイト近郊のポート・ヒューロンで行われた全米自動車労働組合の集会において反・反共の路線の声明を発表し、LIDとの相違を鮮明にした。このポート・ヒューロンの集会にはLIDのオブザーバーとしてハリントンが参加し、SDSの学生達に意見を述べたが、それが受け入れられることはなかった。「オールド・レフト」であるフックやハウは共にロシア革命がスターリンによって「裏切られた」ことによるマルクス主義の再検

討を迫られたという思想的な試練をくぐり抜けており、未だそのような思想的挫折を味わっていないラディカルな学生達の純粋さに危険性を察知していた。SDSは全盛期には数万人のメンバーを抱え、その時代のアメリカの左派で最も力を持つ団体となった。

公民権運動の次に学生達が目標としたのがベトナムの戦争から米軍を撤退させることであった。バークレー校の学園紛争は世界中の大学に飛び火し、また「反戦」は一般民衆や一部のリベラルの支持も集め、社会現象となった。しかし、このベトナム反戦運動は若者たちによる政治運動としてあまりに「ファッショナブル」になりすぎたために、最終的には失速することとなる。

1965年頃からサンフランシスコのベイエリアの学生、若者たちの間にLSDとマリファナが流行し始める。LSDとマリファナはロックやアートを愛好する若者たちの間に爆発的に広まり、多くの学生たちが「ドロップ・アウト」してヒッピーになった。1967年頃にはサンフランシスコのヘイト＝アシュベリーという地区を中心にヒッピーが集まり、サイケデリックカルチャーはロックのレコードやそのカルチャーをセンセーショナルに報じた雑誌等によってサンフランシスコだけではなく、全米、全世界の若者に広がっていった。ラディカルを標榜する学生たちはこのような最新のカウンター・カルチャーを反戦運動に積極的に取り入れた。このことは、運動を広めることには役立ったものの、政治運動がいつの間にか文化運動にすり替わってしまっていたことも意味していた。白人の労働者と学生たちが黒人たちとともに「ウィー・シャル・オーバーカム」を合唱しな

がら行進した公民権運動の時代はもはや過去のものとなっていた。

60年代末には安価で粗悪なLSDとマリファナが広まっただけでなく、ドラッグの流行が覚せい剤、ヘロインといった身体的に危険で精神的な暴力性を伴うようなものになっていき、若者たちを蝕んだ⁽⁸⁾。社会性を失った若者の運動を嫌った一般の人々が1966年のカリフォルニア州知事選で共和党のレーガンを、1968年の大統領選で「法と秩序の回復」を訴えたニクソンを選んだ一方で、文化運動化した若者たちは現実的な政治活動から遊離しつつあった。1969年頃には「新左翼」の運動は政治と文化の両面で手詰まりとなる。泥沼化したベトナム戦争に対し業を煮やした「ウェザーマン」と呼ばれる過激派は爆弾テロを繰り返し、またキング牧師暗殺後に過激化した黒人たちの「ブラック・パンサー」と呼ばれる一派も暴力的な抗議行動を繰り返したため、一般の穏健な人々からの支持を失っていった。このようにして、結局「新左翼」たちも「オールド・レフト」と同様に挫折と思想的な試練を受けることとなったのであった。

IV ローティの「9.11」以後

アメリカの左翼運動の歴史を辿ると、常に「リベラル」と呼ばれる穏健な社会民主主義的、トロッキスト的な左翼と、よりラディカルな左翼との勢力争いがあったことがわかる。穏健な左翼は「ニューディール」期に民主党の勢力として取り込まれたために、一見すると消滅してしまったかのように見えるが、民主党内に取り込まれることによって外部で運動を行っていた時期よりも逆に地道ながらも着実な力を手に入れることができた。一方、ラディカルな左翼

は華々しい運動を行ったが、一部の過激派の行き過ぎた行動により一般の人々の支持を失って実質的に社会を動かす力を確保することができなかった。そして、冷戦を主導する国家として、その補佐をする愛国的な「反共左翼」が存在したということもアメリカ左翼の特徴であった。ローティもトロッキストとして早期に共産党から離反し、冷戦期には最も反共的な一派に属した父ジェームズとその友人フックからの影響を受け、現代においても冷戦の歴史的意義を評価している

また、「9.11」以後のアメリカの対応についても、「左翼」の立場からすると異質な意見を述べている。ローティは「テロリストの基地がカンダハル近郊にあるということが多かれ少なかれ真実ならば、アメリカがとった軍事的行動は正当化される」、「どんな大統領でもブッシュがしたこととほとんど同じことをするだろうし、もし私自身が大統領だったとしても同じだろうと思う。」と述べ、アフガニスタンでのアメリカの軍事行動を容認している。ただし、共和党政権による警察権の強化や表現の自由への締め付け、キリスト教保守派の排外的な高まりについては批判的である。また、「我々が国際的な警察機構を持っていない限り、世界はアメリカに地球の警察官の役割を担うことを望むだろう。そのような国際的機構を作ることが望ましい到達点であり、もし他の国々が協力してそのような機構を創設することができれば、そのときアメリカは徐々に用心棒としての役割を少なくしていくだろう。」とも述べている [Rorty 2006: 115]。

このような態度は、アメリカのアフガニスタンでの軍事行動を擁護する連名の声明をイン

ターネット上で発表し、困惑的な議論を起したM. ウォルツァーの態度と近いものがある。実際にローティはこの声明に対しての意見ではないが、「マイケル・ウォルツァーは私と世代が近く、ブランダイス大学でハウの教え子であったため、現代政治に対する彼の姿勢と私の姿勢はほとんど同一だと考えている。」[Rorty 2002: 9] と述べている。ウォルツァーも『ディセント』誌の執筆者として「オールド・レフト」に近い立場を取り続けてきたが、彼らがこのような態度をとるのは1930年代の反スターリニズムを掲げたトロッキー寄りの左翼の人々にルーツがあり、スターリンやヒトラーの全体主義と積極的に戦ってきた人々の伝統を受け継いでいるからである。「戦争」には無条件で反対する「ニュー・レフト」的な価値観を通過した現代の左派の人々からすると、「左翼」とは呼べないような立場に思えるかもしれないが、歴史的な変遷からローティのように柔軟な意見を持つ「左翼」も存在するということも理解しなければならない。

[投稿受理日2006. 5. 26/掲載決定日2006. 6. 8]

注

- (1) ソ連末期のペレストロイカの時期ではより共産党的な立場を右派、ゴルバチョフ寄りの立場を左派と分類される。
- (2) ローティが20代の青年時代を送った50年代は、いわゆる「ビートニク」を中心とした若者のカウンターカルチャーが勃興しつつあった時期である。ローティは「新左翼」の苗床となったこの文化についてあまり同調せず、「少しだけポット（マリファナ）を吸い、髪を長くのばした。でもそれがすべてです」と述べている。[Rorty 2006: 150]
- (3) 1948年～1973年の間に実施されたアメリカの徴兵制度では18歳～26歳の男子が徴兵されたが、大学に在学している者は対象から外されていた。

- (4) ジェイムズ・ローティはシドニー・フックに息子が研究者を目指すことに困惑していると相談したところ、フックは「たくさん論文を書き、なるべく早く出版すること」と助言したという。
- (5) 当時のプリンストン大学哲学科にはT. ネーゲル, S. クリプキ, G. ハーマン, G. ピッチャー, W. カウフマン, M. ウィルソン等の教授陣が在籍していた。
- (6) ローティはこの時期に哲学者でありプリンストンの同僚達とも親しかったという最初の妻と離婚している。それは友好的な離婚ではなかったために、プリンストンに「居辛くなった」理由の一つとして挙げている [Rorty 2006: 8]
- (7) 黒人も白人と同様に有権者として登録することは可能であった。しかし、黒人にのみ読み書きテストが課されていたり、KKK 団などの脅迫によって有権者登録をする人数は限られていた。黒人が本格的に有権者登録をするようになるのは、公民権運動の後に読み書きテストが廃止されるようになるのを待たなければならない。
- (8) ビートルズのメンバーの一人、ジョージ・ハリソンはヘイト＝アシュベリーを訪問した時、数千人のドラッグ中毒の若者に囲まれて身動きがとれなくなったという体験をした。その時のことを次のように述べている。「実際に行ってみるとドラッグ漬けになったニキビ面のドロップ・アウトたちがゴロゴロいるばかりでそのおぞましさを見たら僕はいっぺんに嫌になった。浮浪者や落ちこぼれが溢れていた。その多くはまだ年端も行かないやつなのにみんな LSD をやっている。アメリカ中からこの LSD のメッカに集まってきているわけさ。…あれではっきりとドラッグカルチャーの現実がどういうものかわかった。僕が思っていたようなもの、精神を覚醒させ、芸術性を促す、そういうものではなかった。ヘイト＝アシュベリーの人は本当におかしくなっていたよ。あれを見て僕は気づいたんだ、“これは間違ってる”って。」 [Harrison 2000: 259]。

カにおける左翼思想』小澤照彦 訳 晃洋書房 (2000)

Richard Rorty 1999. *Philosophy and social hope*. London. 邦訳『リベラル・ユートピアという希望』須藤訓任, 渡辺啓真 訳 岩波書店 (2002)

Richard Rorty 2002. *Against bosses, against oligarchies: a conversation with Richard Rorty*. Charlottesville.

Richard Rorty 2006. *Take care of freedom and truth will take care of itself: interviews with Richard Rorty*. edited by Eduardo Mendieta. California.

Michael Harrington 1972. *Socialism*. New York.

邦訳『社会主義の展望：高度工業化社会の時代に』飯田健一, 谷耕樹訳 東京創元社 (1977)

野家啓一 2003. 『理戦 74 特集リチャード・ローティ』実践社 (2003年秋号)

George Harrison 2000. 『The Beatles アンソロジー』ザ・ビートルズ・クラブ監修訳；島田陽子, 野沢玲子, マッケンジー・スミス訳；斎藤早苗監修 リットーミュージック (2000)

堀邦維 2000. 『ニューヨーク知識人：ユダヤ的知性とアメリカ文化』彩流社 (2000)

Todd Gitlin 1987. 『60年代アメリカ：希望と怒りの日々』疋田三良, 向井俊二訳 彩流社 (1993)

Daniel Bell 1960. *The end of ideology; on the exhaustion of political ideas in the fifties*. Glencoe. 邦訳『イデオロギーの終焉：1950年代における政治思想の涸渇について』岡田直之 訳 東京創元新社 (1969)

参考文献一覧

Richard Rorty 1998. *Achieving our country : leftist thought in twentieth-century America*. Cambridge. 邦訳『アメリカ未完のプロジェクト～20世紀アメリ